

自然とことばの力

尹 健 次

もうすぐまた冬である。

ついこのあいだ、木々の緑がいつせいに芽を吹き、山野を覆っていたはずなのに、いまは早くも木々の静寂が深まり、来るべき厳しい寒さに備えようとしているようである。自然の摂理はまことに神秘的かつ躍動的で、冷厳でもあるというべきか。

季節は生命(いのち)に満ちあふれている。冬は冬で、自然の奥深さをかいま見せてくれる。人生もやはり同じであろうか。若い時は若いなりに、歳を重ねれば重ねるなりに、それぞれに思いを込めた日々を刻み込んでいく。日常の積み重ねそのものが生であり、それは孤独と祈りを反復するなかでひとつの終焉につながる。孤独と祈り、それは根源的にはことばの力を信じ、追い求めつづけることなのかも知れない。

人生のひとつの区切りを迎えたわたしは、なにを思ったのか、〈詩と写真、そして思索の場〉と銘打ったホームページを開設した。うら若き学生時代にガリ版刷りした「詩」らしきものを載せ、各地をめぐりながら撮り溜めた写真を掲げ、拙い文章を書き連ねながら自分の想いを語りかけている。

詩と写真、それはことばと映像の違いはあっても、語りかける、訴える、求めつづけるという意味ではともに力づよいものである。そこには日常の凝縮があり、その凝縮をつうじた孤独と祈りの貫きがあるといえる。といっても、実際には、そこに披露されている「詩」と写真はなお未熟なものにすぎないが、それはいつか、春の柔らかな輝き、鮮明なひかりに通じるものであるかもしれない。

写真を撮るようになってから、草花と樹木、山と高原、海と空などに向き合い、それをレンズを通して小さなイメージに切り取り、表現する作業を繰り返すなかで、改めて自然の偉大さ、ときには怖さを実感する。それは自己の投影でもあるが、実際野原の一隅にひっそりと咲きそして散っていく草花を見るとき、その可憐さのなかにある繊細

な色調だけでなく、微妙な陰影にもしばしば驚かされる。また山々の懷に抱かれて空を見上げるとき、刻々と変化していく雲の多様な姿に自らの生きざまを重ねてもしまう。これまでよりはるかに、自然の摂理、自然の豊かさ、そしてその偉大さと同時にその怖さに身を震わせるようになったともいえるか。

ただ、いまのところは、写真を撮るといってもなお低いレベルのものでしかなく、写真芸術にははるかに及ばないものでしかない。それよりも最近、詩のもつ奥深さ、ことばの力に改めて感嘆しつつある。一篇の詩に刻み込まれた人間の業(ごう)や歴史にほんろうされた個人史の重さに圧倒されてしまう。

なかでも、つい先ごろ土曜美術社出版販売から刊行された森田進・佐川亜紀編『在日コリアン詩選集：1916年－2004年』に収録されている詩にはまったく驚愕する思いである。この本は、副題にあるとおり、1916年以降現在まで日本に在住した朝鮮人(コリアン)の詩をはじめ集大成した500ページを超える大著である。そこには、日本の植民地支配のなかで呻吟した人びとの叫びがあり、また「解放」とは名ばかりの南北分断の時代を強要された人生の苦悩がある。

日本の詩壇がややもすると抽象的、観念的、個人的な色彩を帯びてきたなかで、詩の分野における在日の蓄積がこんなに大きいものとはまったく予想もしなかった。そこには過酷な経験に裏打ちされた詩的想像力があり、内容も民族や国家を詠ったものから、自己の歴史やアイデンティティにまつわる苦悩やなにげない日常の想いをえがいたもの、ポストモダン的なものも含めて、じつに多彩、多様である。ひとことでいうなら、そこに見られる詩的表現は、日々の悲哀と苦痛の堆積を伝えることばの力そのものではないかと思う。

(外国語学部教授・思想史／日朝関係史)

『宿老・田中熊吉伝―鉄に挑んだ男の生涯―』

佐木隆三著 文藝春秋
B289-1581 289-603

戸田龍介

この本は、「高炉の神様」と呼ばれた一人の熟練工の評伝である。その男の名前は田中熊吉といい、定年のない終身雇用の熟練工（「宿老」と呼ばれた）であった。田中は、明治34（1901）年に日本の命運をかけて操業を開始した官営八幡製鉄所（現新日本製鉄八幡製鉄所）の第一高炉建造から関わり、98歳で亡くなるまで宿老として働き続けたのである。彼の生涯は、日本における製鉄業の歴史そのものなのである。

さて、このような評伝を、工学部の教員でもない私がなぜ推薦図書とするのか。あるいは、投資ファンドが跋扈する世を憂い、「モノづくりの復権」でも唱えようしているのか。それとも、ニートと呼ばれる無気力な若者達の現状を憂い、確固たる目的や目標を持って一途に仕事をするべきだと熱く語り掛けたいのか。否、そのような意図は特にない。むしろテキストの解釈は多様であって良い。この本も例えば、鉄づくりを天職と定め、片目を失ってもハンマーを振るい続けた一途な職人の評伝として読んでもいい。あるいは、ドイツ人技師と日本人職工達との確執と友情という点に注目すれば、お雇い外国人の物語としても楽しめる。なにより、国家的事業として大上段に語られることの多かった八幡製鉄所の歴史が、一現場熟練工の目から生き生きと語られる一級のルポルタージュとなっていることも見逃せない。

しかしながら、そのように読んで欲しいためにこの本をとりあげたのではない。そもそもこの本に私が興味を抱いたのは、ごく私的な関心からである。実は、私の父そして祖父も田中熊吉が働いた八幡製鉄所に入所しているのである。不肖の三代目は製鉄マンにはなり損ねてしまったが、今でも製鉄所に関する記事や書籍には、自分の研究に

は特に関係がなくともつい目が行ってしまう。ちなみに当評伝は、著者佐木隆三氏が『くろがね』という八幡製鉄所社内報の編集部員であった当時、実際に田中熊吉にインタビューした取材記録を元に行っていることがプロローグに記されている。そのくぐりを目にした時私の頭の中には、この『くろがね』という雑誌が父の書斎に積み上げられており、内容も分からないまま中を覗いていた自分の姿が鮮やかに蘇ってきたのである。文中で佐木氏が描写する北九州八幡の様子は、田中熊吉の生き様という当評伝の主旨にとって特に本筋というわけではないのだろうが、私の琴線には度々引っかかるものがあった。何と云っても、田中が98歳で亡くなった時と場所（昭和47年、北九州市八幡東区高見二丁目）に、私自身が同時期同社宅地内で小学生として日々を過ごしていたことを知った時には本当に驚いた。

既述のように、私がこの本を推薦図書としたのは、この本の内容に対して大学生の皆さんに共感して欲しかったわけではない。あえて言えば、本を読みたいと思う動機の一つについて話したかったのだ。「自分とは何者なのか」という視点で選びかつ読む本は、とても興味深いものである。さて、読書の秋である。「自分とは何者なのか」を探る知的興奮の旅に、皆さんも出てみてはいかがだろうか。ただしこの旅は明確な目的地がないため、つい途中で引き返したくなることが必至である。そのような時のために、著者の次の言葉を最後に贈りたい。「眠っている資料は、立ち上がる機会を待っており、こちらが本気になって求めれば必ず巡り合えることを、いくつかの経験から信じている」。

（経済学部助教授・会計学）

『サドルの上で考えた—自転車的なる精神の欠片—』^{かけら}

正田智著 東京書籍
B049-293

岡本 専太郎

日東、島野、丹下、三ヶ島、前田、栄、本所、杉野、吉貝など聞いて、はは〜んという方は、その昔自転車少年だったかも知れない。これらは、かつての国内自転車部品メーカーである。スプリント競技世界選手権で10連覇した中野浩一が所属していたサンツアー(前田工業)は、現在は台湾のSR-Suntour社に引き継がれている。自転車ロードレースで有名なツール・ド・フランスやジロ・デ・イタリアに多量のパーツ供給もしている島野工業を除き、多くの国内部品メーカーが衰退している。これは、近距離移動用自転車(ママチャリ)が需要の大半を占める日本の特異な自転車事情のためであり、近年はやりのMTB含め、格安の台湾製や中国製のものが量販されていることに起因している。国内産業の衰退も問題ではあるが、今や、1980年頃までの日本独自の自転車文化の希薄化への嘆きと郷愁、それと同時に問題化してきたマナーの悪化は社会問題でさえある。

本来、自転車に乗ると言う行為は、その移動手段であると言う意味以外に、有酸素的運動を行える有効なスポーツとして扱うことができるし、車やオートバイほど速くはなく、歩行ほど遅くなく、適度な風量によって冷却されながら、路傍の名も無き花に目を留めることもできる、情緒的で環境に優しい乗り物である。しかし、駅前の不法駐輪などに見られるような社会的な問題の元凶でもあり、欧米と比べ異質で遅れている自転車行政等の取り巻く問題は多い。ここで、私がすすめる一冊は、「Bicycle NAVI」「バイシクルクラブ」などの

雑誌掲載の著者のエッセイをまとめたもので、自転車に乗る行為によって解放される思考条件下で徒然に思われる面白きこと—自転車で旅することとそれへの誘い—社会的な意味での取り巻く諸問題を指摘することと、そこから見えてくる現代社会像を書き下ろしたものである。自称「自転車ツーキニスト」である著者は、毎日往復24Kmを自転車通勤し、時には佐渡へ、大島へ、大阪へ、長野へと自転車で旅する。著作は、自転車通勤の自慢でもなく、それを読者に強要しslow lifeを誇示するような自己満足書でもなく、ひたすら自転車=ecoをうたうわけでなく、各地を旅する紀行文でもなく、従って、実用書でもない。

私も上大岡の自宅には、ママチャリでは無いちょっとした自転車があり、極たまに大学への自転車通勤を試みることもある。通常バス-電車-バスで1時間弱だが、時間的には自転車の方が5分ほど早い。大岡川沿いに関内へ、MMを抜け、東神奈川から大学へという道のりで、できるだけ幹線道路を避けるルートで、もちろん、この著者と同様に車道(左)を走ってくる。こうした行為には、単に移動する、体を動かすという意味以外の意味、つまり自転車に乗ることではしか得られない種類の時間と心持ちがあるような気がする。

著者の思う“自転車的なる精神”とは何かを見つけていただきたい。それは、きっと自転車に乗らなくても共感し得るものであろうし、自転車をお持ちなら、ぶらりと散策にでかけてみてはいかがだろうか。(工学部助教授・有機金属化学)

ジョンストン『中国と日本:米艦ポーハタン号航海記』1861年

Johnston, James D. 1817-1896

China and Japan : being a narrative of the cruise of the U.S. steam-frigate Powhatan, in the years 1857, '58, '59, and '60. /by James D. Johnston. --Philadelphia:C. Desilver, 1861. -- [xii], [13-448], 5-16 p., [8] leaves of plates: col. ports., map; 20cm. -- "Including an account of the Japanese Embassy to the United States."

"Illustrated with Life Portraits of the Ambassadors and Their Principal Officials" --Appendix: p. 415-448. --Full red cloth.

著者ジョンストンは1817年ケンタッキーに生まれ、1832年15歳で海軍兵学校に入学した以降、生涯の大半を軍務に服している。本書初版は1860年、万延元年の遣米使節団が渡米した年、本学所蔵は南北戦争(1861~1865)の勃発年の1861年発行で、ジョンストンは南部連盟の指揮官として奔走し始める頃である。少し時計の針を戻すと、日本では、ペリーの黒船の〈外圧〉による1854年の〈開国〉、

その後アメリカ合衆国と結ばれた不平等条約、そして幕末期の騒乱があった。サブタイトルにあるように本書は、1857年から1860年にかけての日本への『航海記』である。長かった〈鎖国〉下では、〈日本〉及び〈日本人〉の〈自己相対化〉=〈空白〉を埋めることが十分に出来なかったわけであるから、それまでのケンペル他の〈日本研究〉がそうであったように、もし当時の日本人が本書に触れていれば、外国人である著者による、この2年3カ月間の航海の時間的経過でなされた日本の政治的、社会的、文化的状況への洞察(居留地における横浜の政治的、経済的、商業的重要性への記述ほか)からもそれらを埋めることが出来たかもしれない。これまで〈開国〉後のアメリカとの条約の不平等さに目が向けられ、この〈外圧〉を乗切れたのは、とぎすまされた国際的感覚を持っていた幕閣の交渉力と語学力所以であったことに目が向けられ始めたのは最近のことといってもよい。全16章と「天津条約、日米修好通商条約」の Appendix から成っている本書から後者の側面を理解することができ、〈開国〉以降の対アメリカ外交史を知る上でも必読書になっている。上記の遣米使節団が実施されねばならなかったのは、1854年(安政5年)6月19日、横浜沖停泊中のポーハタン号上で幕府とアメリカ総領事ハリスとの間に調印した日米修好通商条約第14条(末条、本書442頁)に「本条約は1859年7月4日(安政6年6月5日)に発効し、この日もしくはそれ以前にワシントン市において批准書を交換するものとする」としていたからである。この遣米使節団の Simme-Boozen-no-kami 新見豊前守正興、Muragaki-Awadino-kami 村垣淡路守範、Ogure-Bungo-no-kami 小栗上野介らへの著者の人物評が面白い(本書338頁以下)。新見は「光り輝くような知性もってはいなかったが実に温和で親切な人であったこと」、村垣は「これまで箱館奉行だった人で、新見よりも知的能力が優れていた」、小栗は「使節団のなかで誰よりもそつなく、ずばぬけて実務的な人で、どの訪問先でも当局と単独で親交を深めることが出来た」と絶賛している。その後の小栗の生涯を顧みるならば、感慨深いものがある。

(情報サービス課 吉田 隆)



小栗豊後守

『ベストセラー図書コーナー』を設置

横浜図書館では、最近話題になっている図書、ベストセラー図書を集めたコーナーを設けています。場所は、1階開架閲覧室の就職・資格本コーナーの横です。ここでは、1か月に3回位のペースで、今話題になっている図書を配架しています。ぜひ、のぞいてみてください。

ベストセラー図書コーナー BOOK LIST

- ・10月1日～10月31日に配架した図書。(受入日順)
- ・配架した図書は、4週間位このコーナーに置いた後、通常の開架閲覧室に戻します。

ナカダのナゼダ!? 中田宏、海原純子著 小学館
2005.10 B304-1233

帰ってきたかぐや姫 佐藤とみこ著 さんが出版
2005.8 B913.6-3848

憑神 浅田次郎著 新潮社 2005.9 B913.6-3849

風の盆幻想 内田康夫著 幻冬舎 2005.9
B913.6-3850

人とお金が集まるブログ作りの秘伝書 石崎秀穂著 シー
アンドアール研究所 2005.8 B547.8-1233

骨髄ドナーに選ばれちゃいました 石野鉄著 小学館
2005.8 B916-638

ザ・プロフェッショナル:21世紀をいかに生き抜くか 大前
研一著 ダイアモンド社 2005.9 B159-339

凍 沢木耕太郎著 新潮社 2005.9 B913.6-3859

ララピポ 奥田英朗著 幻冬舎 2005.9 B913.6-3860

川島隆太教授の脳を鍛える大人の音読ドリル:名作音読・漢
字書き取り60日 川島隆太著 くもん出版 2003.11
B490-3359

得する贈与とモメない相続:トラブル激増時代に、モメずに上
手にお金をもらうコツ 灰谷健司著 学研 2005.10
B324.7-82

ワクワクしながら夢を叶える宝地活用術:あなたの“夢
の指定席”を予約する7つの習慣 望月俊孝著 ゴマブックス
2005.10 B159-340

なぜあの人はプチリタイヤでできているのか?:何もしないで
月50万円!「お金」と「自由」を手に入れた、10人に聞きました!
石井貴士著 ゴマブックス 2005.10 B353-810

仕事のヒント 神田昌典著 フォレスト出版 2005.10
B159-341

民間防衛:あらゆる危険から身をまもる:新装版 スイス政
府編著;原書房編集部訳 原書房 2005.9 B390-779

覇王の夢 津本陽著 幻冬舎 2005.8 B913.6-3869

マインドマップ・ノート術:記憶力・発想力が驚くほど高
まる ウィリアム・リード著 フォレスト出版 2005.9
B141-671

新生きかた上手 日野原重明著 ユーリーグ 2005.10
B490.4-4-243

国家の自縛 佐藤優著;斎藤勉聞き手 産経新聞出版
2005.9 B319.1-633

マイナス水素イオンと健康革命:もっと知りたい 若山利
文著 ナナ・コーポレート・コミュニケーション 2005.9
B490-3363

Winnyの技術 金子勇著;アスキー書籍編集部編 アスキー

2005.10 B547.8-1236

オークション起業の実践成功マニュアル:リスクゼロでは
じめる 西村泰一著 日本実業出版社 2005.10
B353-811

告白 チャールズ・R・ジェンキンス著;伊藤真訳 角川
書店 2005.10 B289-1574

日本経済大好況、目前! 増田俊男著 アスコム 2005.10
B332.16-1123

平凡な大学生のボクがネット株で3億円稼いだ秘術教えま
す! 三村雄太著 扶桑社 2005.8 B355.6-754

「親力(おやりよく)」で決まる!:子供を伸ばすために親にで
きること 親野智可等著 宝島社 2004.10 B379-403

ミリオネアの教え、僕の気づき:ロバート・キヨサキ/アン
ソニー・ロビンズ/ジョン・グレイ/アラン&バーバラ・ピー
ズ/ジョン・フォッピ 河本隆行著 成甲書房 2005.10
B159-344

あなたが生まれてきた理由(わけ) 高橋佳子著 三宝出版
2005.9 B169-155

ももこタイムス さくらももこ著 集英社 2005.9
B914.6-2068

おとなのひとについてほしかった24のこと ヨゼフ・パイ
オン著;多田文子訳 祥伝社 2005.6 B159-345

五木寛之の百寺巡礼:ガイド版(第10巻:四国・九州) 五木
寛之監修;講談社学芸局編 講談社 2005.9 B185-10-63

百寺巡礼第10巻:四国・九州(観世音寺・梅林寺・善通寺・
霊山寺・興福寺・崇福寺・本妙寺・人吉別院・富貴寺・羅
漢寺) 五木寛之著 講談社 2005.9 B185-10-64

ネクロポリス(上) 恩田陸著 朝日新聞社 2005.10
B913.6-1-3886

ネクロポリス(下) 恩田陸著 朝日新聞社 2005.10
B913.6-2-3886

はじめての「独立・起業」なるほど成功ガイド:必ず直面
する悩みを解決する100の実践ポイント 吉沢大著 日本
実業出版社 2005.10 B335-245

ドラゴン・イングリッシュ:基本英文100 竹岡広信著
講談社 2005.9 B836-153

小悪魔な女になる方法:銀座ホステス作家の実践テク147:
ミステリアスなイイ女は、あらゆる男を夢中にさせる 蝶々
著 大和出版 2004.6 B159-346

なぜ、占い師は信用されるのか?:裏コミュニケーション
術「コールドリーディング」のすべて 石井裕之著 フォ
レスト出版 2005.10 B361.5-916

シニアマーケットに学ぶ資産運用アドバイス 鬼崎泰至編
著 金融財政事情研究会 2005.10 B338.1-472

■外国語学部設立40周年記念特別展示

『ドン・キホーテ(前篇)出版400周年記念展』開催

展示場所：横浜図書館 1階展示コーナー

展示期間：2005年11月21日～2006年3月28日

ドン・キホーテと言えば、だれでも思い浮かべるのが、野原に立つ風車を巨人と思い込み、槍を構えて突進するという場面だと思います。五十歳にならんとする田舎紳士が、流行の騎士道物語を毎日毎日読み耽っているうちに、次第にそこに書かれていることが本当にあったことと思込んでいく。そして男は、ついに狂気と幻想にとらわれ、古ぼけた甲冑に身を固め、年老いたやせ馬ロシナンテにまたがって諸国遍歴の旅に出ることになります。

この、セルバンテス (Miguel de Cervantes Saavedra, 1547-1616) が書いた「ドン・キホーテ」の前篇が刊行されて、今年でちょうど400年にあたり、スペインはもとより、ラテンアメリカ等の国々で記念プロジェクトが進行しています。本学外国語学部においても、スペイン語学科が設立40周年を迎えることから、次ページのとおり、これを記念する行事を行うことになりました。

そこで横浜図書館 1階展示コーナーでは、その記念行事に合わせて『ドン・キホーテ(前篇)出版400周年記念展』を開催します。展示では、ドン・キホーテの[各国語訳と評論]、[映画・演劇・音楽]、[貴重書]の3つのカテゴリーに分けて紹介します。

まず、各国語訳・評論のコーナーでは、ドン・キホーテの先駆的訳者であり、元本学スペイン語学科の専任教員であった会田由先生、牛島信明先生の日本語訳版をはじめ、スペイン語版、英語版、フランス語版、ドイツ語版、イタリア語版、中国語版を展示しています。また、スペイン語学科教授の岩根圀和先生の「贋作ドン・キホーテ」や、その他の評論等を紹介しています。

映画・演劇・音楽等の展示ケースには、日本が生んだ世界のトップダンサーである熊川哲也やミ

ハイル・バリシニコフのDVD、交響詩「ドン・キホーテ」のCD、松本幸四郎主演のミュージカル「ラ・マンチャの男」の写真集等を展示しています。また、展示期間中の昼休みの時間に、図書館視聴覚ホールにおいてドン・キホーテのバレエや映画の上映を企画しています。

貴重書の展示では、1842年にロンドンで創刊された世界最初の絵入り新聞『イラストレイテッド・ロンドンニュース』(1905年)の「ドン・キホーテ」出版300年記念や『学術・芸術総合百科事典』(1826年)、『ロンドン百科事典もしくは科学、芸術、文芸、機械工学の普遍辞典』(1829年)等に記述されたセルバンテスと「ドン・キホーテ」から、当時の知的雰囲気概観しています。

世界的に有名なドン・キホーテ。しかし、大部ゆえに意外に全文を読み通した人が少ないと言われている小説。皆さん、この機会に挑戦してみたいかがでしょうか。



「DON QUIJOTE DE LA MANCHA」(Planeta)の挿絵

神奈川大学外国語学部（スペイン語学科）設立40周年記念
神奈川大学外国語学部国際文化交流学科新設記念

DON QUIJOTE WEEK in 神奈川大学

講 演

- 「ドン・キホーテの魅力」 岩根圀和（スペイン語学科教授）
11月25日（金） 10：30～12：00 20 - 310講堂
- 「セルバンテスとインディアス」 青木康征（スペイン語学科教授）
11月25日（金） 14：40～16：10 23 - 203講堂
- 「21世紀に生きるドン・キホーテ」 ハビエル・サン・ホセ・レラ（サラマンカ大学教授）
12月1日（木） 10：30～12：15 7 - 34講堂

スペイン語学科生による語劇

- R. アスコーナ/M. スカパーロ翻案
「ドン・キホーテ・デ・ラ・マンチャ」
12月2日（金） 13：30～15：00（13：00開場） 16号館セレストホール

渡邊恵子自選絵画展を開催中

湘南ひらつかキャンパス図書室

- 展示場所：平塚図書室展示コーナー
- 期 間：10月3日（月）～11月30日（水）
- 時 間：9：30～16：30（日曜・祭日休館）

掛け替えのない平和の中だからこそ優れた美術作品が生まれる背景があるという観点から、戦後50周年にあたる1995年に創刊された「戦後日本美術総集」（麗人社）が、この度10年ぶりに発行されました。この第2巻には、戦後から現在にいたる絵画から彫刻、工芸、書道まで、アーティスト198人の秀作が厳選して収録しており、日本美術の水準を理解してもらうため全文が日本語と英語による併記で紹介されています。

その中に、時代を象徴する日本の代表的アーティストと共に名を連ねて、今回展示の渡邊恵子さんの代表作品《亀治郎三態》が収録されています。

平塚図書室展示コーナーの秋の催し物《渡邊恵子自選絵画展》は、ご本人が本学法学部（川田昇ゼミ）出身で、『母校の学生にも是非見てもらいたい』と快諾されたことから実現しました。『私の作品は、二科展初入選の時から《変身》に焦点をあてています。特に男らしい男、男の中の男の人が化粧することによって変身することに尽きせぬ興味を感じています。今後も《変身》をテーマに制作して行きたいと考えています』とのことでした。

渡邊さんは現在、二科展（本展）6年連続入選中です。



湘南ひらつかキャンパス図書室 学年末試験に向け休日開館を実施

前期試験に伴い湘南ひらつかキャンパスで初めて実施した休日開館は、利用者アンケート調査の結果をみても、利用した学生のみなさんから「今後も継続してくれたらたいへん嬉しい」など多くの反響が寄せられました。

そこでこのたび、前期に引き続き来年冬休み明けから始まる学年末試験に向け、平塚キャンパス図書室の冬期休日開館を下記のとおり実施します。

記

- 開館日：①2006年1月8日（日）
②2006年1月9日（月）（成人の日）
③2006年1月15日（日）
④2006年1月22日（日）

開館時間：9時10分開館～16時50分閉館

なお、当日売店は休業しておりますので、昼食は各自でご用意ください。

図書館の利用案内

1. 冬季長期貸出について

冬休み長期貸出を次の期間行います。
貸出期間：12月5日（月）～12月26日（月）
返却期限：2006年1月16日（月）

2. 年末年始の休館・休室について

12月27日（火）～2006年1月7日（土）

3. 2005年度後期情報リテラシーセミナー開催

オンラインデータベースを利用者により深く理解していただき、活用してもらうために、情報リテラシーセミナー室において、専門講師によるセミナーを実施しています。

開催日：11月14日（月）～11月18日（金）
11月21日（月）～11月25日（金）

4. 新規データベースのトライアルキャンペーン実施について

「日経 BP」、「有報革命」、「Pro Quest」、「JSTOR」

など13のデータベースについて、11月中旬から約1か月間トライアル（試用）を実施いたします。ぜひこの機会にお試ください。詳細は図書館ホームページをご覧ください。

書架から

戦後60年を記念して、在日の作家・金石範氏の作品集『金石範作品集ⅠⅡ』（平凡社、2005年10月）が刊行された。金石範氏は、1976年から20年間、すでにライフワークとした『火山島』（全7巻、文藝春秋社）を書き上げ、今回の作品集にはデビュー作『鴉の死』など、それ以外の主な作品がほとんど収められている。彼の生涯をかけた文学のテーマは、1948年現在の韓国済州島で起こり、長い間歴史の闇のなかにあった悲劇「四・三事件」である。このとき、美しい火山の島で、どれほどたくさんの命が失われたことだろう。戦後60年、私たちにはまだまだ見つめ直すべき多くの歴史がある。（K）